

ホブソン・ジョブソン —インド起源英外来語辞典—

Yule, Henry.

Hobson-Jobson; a glossary of colloquial Anglo-Indian words and phrases ... by Henry Yule and A.C. Burnell.
New ed. by William Crooke. London, Routledge [1903]
1021 p. First published 1886.

当館請求記号 KS 57-1

「苦力」の語源は何語であろう。中国語ではなさそうだ、と職場の話題になった。広辞苑には、“クーリー [Kūlī ヒンディ・Coolie イギリス・苦力] もとインド・中国の下層労働者の呼称。転じて、東南アジア諸地域の筋肉労働者。クーリー”とある。インド語源らしいことが判った。研究社の英和辞典には“苦力(クーリー)(中国・インド・マライ地方などで働く土人労働者); (酷使される)下級労働者”となっている。語源についての記述がないのは、あたりまえの英語となっているからであろうか。そこでこのホブソン・ジョブソンにたよることとする。

“Cooly 賃労働者, 又は荷物運搬人; 現在(註 1880年代当時)では特に, インド・中国からモウリシアス, レユニオン, 西インド, 特にフランス植民地のプランテーションへの出稼ぎ労働者をいう。その生活は奴隷に近い。インド上部地方では熟練労働者, 乞食などと区別して土や煉瓦などを運ぶ下級労働者に限定して使う。……”

以下約2頁にわたり, 語源についての各学説の紹介と, 英語に入った経過を年代順に文献から抜萃している。その最初は,

1548.—“And for the duty from the Colés who fish at the sea-stakes and on the riber of Bacaim...”—S. Botelho,

Tombo, 155.

以下, Collijs, Colles, Kolís, Coolees, Coolies と綴りが変わったことが例示されている。

編者の一人, ユール(1820—89)はインド総督府の軍人であるが, 中央アジア研究家として有名である。主著「カセイへの交通路」はハクルート叢書に収められ, わが国にも一部翻訳された。共編者のバーネル(1840—82)は案外知られていない。彼はキングズ・カレッジ卒業後, インド文官試験に合格, 20才で渡印しマドラス政庁の地方裁判官となり, のち健康を害して引退した。サンスクリット古文書の蒐集家で, インディア・オフィス図書館にすべてを寄贈した。タンジョール王宮図書館のサンスクリット索引を作ったり, 「南インド古文学便覧」を編さんしたり, 図書館の仕事に向いた人であった。ユールは彼を知らなかった。一度だけロンドンのインディア・オフィス図書館で会った, と本序文に記している。二人はお互の目指すものが同じことを知り, 協力することになった。

以降10年, 手紙で連絡しながら仕事を続けた。しかしバーネルは完成を見ることなく死んだ。享年42才。ユールは決意を新たにその晩年をこの仕事に捧げた。彼はバーネルの原稿をふくめ最低4回書き直したと

いう。ユールもまた完成後3年、69才で死んだ。序文に、“Ars longa, vita brevis”と感想を述べている。これは自己の業績を芸術として自負したわけではなく、「少年老いやすく、学なり難し」といった嘆息であろう。特にバーネルの若死を悔やんだものと思う。

さて書名のことであるが、ホブソン・ジョブソンは慣れない言葉で、普通の辞書にはない。パンジャブの英軍駐屯地でイスラム教徒が「ヤー ハッサン。ヤー フセイン」とよび合っていたのが、英人にこのように聞え、やがて東洋語を意味する俗語となった。本書の引用例には、

1829. — “Them paper boxes are purty looking consarns, but then the folks makes sich a noise, firing and troompeting and shouting Hobson Jobson, Hobson Jobson.” — *Oriental Sporting mag.*

とあり、それまで、Vah Hussein! sciah

Hussein! (1618) Hassein and Jassein (1763) など各様に呼ばれた例があげられている。

語彙の収録範囲はインドにとどまらず、中東、東南ア、中国、日本まで含まれる。日本について気付いたものをあげれば、

Bonze(坊主), Daimio(大名), Harakiri(腹切り), Itzeboo(一分), Japan, Jentryrickshaw(人力車), Lewchew, Liukiu, Loochoo, Norimono(乗り物), Obang(大判), Shintoo(神道) などがある。当時どんな言葉が英人に膾炙したか判る。

本著出版後17年経った1903年にクルーク(1848—)による補訂版が出た。

フォスター、グリアスンなど当代の東洋学者が多く協力しているのは、いかに本書が評価されていたかを示している。現在流布しているのはこの新版のリプリントで、以上の紹介も本版によった。

(アジア・アフリカ課主査 河嶋慎一)

